SIC顧問会議　議事録（案）

２０２０年１１月２７日

一般社団法人システムイノベーションセンター

1. 開催日時　２０２０年１１月２６日　９：００～１０：００
2. 開催形式　オンライン　Teams
3. 出席者

・顧問　　三菱UFJ銀行　　取締役常務執行役員　亀田浩樹 様

　　　　　野村総合研究所　常務執行役員　　　　立松博史 様

・SIC側　代表理事・センター長　斎藤裕　副センター長　木村英紀、

実行委員長　松本隆明　、　事務局　久保忠伴（記録）

1. 議事内容

SIC顧問会議を開催した。今回は、コロナ禍の中、オンライン開催とした。初対面の会議でもあり、自己紹介の後に、SIC側の活動報告を行い、顧問のご意見を頂いた。

1. センター長挨拶と出席者自己紹
2. SICの活動について報告　　木村副センター長

設立後２年弱の活動実績と今後の活動について資料―２、資料―３、資料―４を使い説明。

以下のSICの３つの活動の柱について活動概要を説明。

・企業のシステム化の課題　うまく回っていない。会員企業からの問題点がでてこない。ここが懸案事項。

・社会課題の解決　分科会の活動の目的でもあり、ある程度の成果が上がりつつある。たとえばスマートフードシステム分科会はすでに提言と報告書を提出し、農水省官房から高い評価を得ている。次年度はいくつかの分科会を立ち上げたい。

・人材育成協議会　システム塾、個別分野の講習会を開催。オンライン教育の適切な形態を探っている。今後、ケーススタディ講習会、経営者のマインドセットの改革の研修（システム化の研修）

来年度は国際シンポジウムを計画　MIT、TRIから招聘して開催。

・ロードマップ委員会を立ち上げで、骨太のSIC哲学と中期目標を策定する予定

＊ニュースレターの執筆を亀田顧問に依頼し、引き受けていただけることになった。

（３）　顧問からのご意見

齋藤センター長からの依頼

SICの特徴は学術界が後ろにいて、知見が得られるところにある。文理融合、産業構造、エコシステムの構築には、経済学、経営学、極論すれば倫理まで必要だが、今の状況では足りない。SICの知見を提供して頂く。これを踏まえて活動し、DADC等で官の力を引き出したいので、意見をお願いしたい。SICの活動が世の中を変えていくようになれば良い。斎藤センター長

上記センター長の考えを踏まえて今後のSICの活動の方向性について意見を頂いた。

亀田顧問

・個別の会員企業の支援が不十分な点について。包括的な支援を狙うよりもクロスインダストリー的な社会連携を深めていくのが良い。

　・人財育成について。大きな課題であるが、アーキテクチャー、アーキテクト、デジタル化の定義が曖昧なところがあり明確にすべき。経験の場を提供することが大事。センターとして定義していく必要がある。

　・インダストリー横断の観点　協調領域でないものまで各社個別に開発している。

　　協調領域は、業界横断でまとめて活動すべき。結果として、企業は競争領域に集中できるようなアクティビティにつながればよい

・MIT留学の経験もあり、連携支援をさせていただきたい。

DADCも業界のアーキキテクチャをどうするかを議論している。アーキテクチャ設計には　構造の提言が必要。

立松顧問

　　・３つのテ活動の柱について。（１）の個別企業への支援は、DXについて、DはあるがXがない。明確なゴール設定ができてない。ゴール設定がないのでスピード感もでてこない。その理由は２にある。競争領域と協調領域が明確になっていない

デジタル社会資本で解決していく目標を明確にしてSICの運動論ができればよい。

・コロナになって経営者の考えがこの半年で変わってきたと思っている。SDGｓでなく、「パーパス」がキーワードとして出てきている。

２の活動の社会課題をどう解いていくのか、について打ち出せるとSICの活動はよりいい　　活動になるかもしれない。

（４）センター長まとめ

* + 日本が直面する社会課題について適切なテーマを選んでやることが大切と思う。
  + クロスインダストリー的なテーマで個別企業へのメッセージをどうするかの検討が必要。
  + 人材育成は関連するキーワード（アーキテクトなど）の定義を明確にする必要がある。
  + 業界横断的なところを考えて競争領域を明確にして投資できるような環境整備
  + 実際の課題に対してメッセージを出す。

（５）　デジタルエコノミー分科会について、松本実行委員長より

協調領域の分科会活動として表記分科会の立ち上げを準備している。関心企業も多い。協力をお願いしたい。

資料―１　議事次第

資料―２　SICのこれまでの活動状況

資料―３　SICパンフレット

資料―４　スマートフードシステム分科会政策提言書

（文責：木村、久保）